

国立歴史民俗博物館の愉悦⑬

こうこくたいへいすごろく
「皇国泰平寿語録」から新時代を読む

これは「皇国泰平寿語録」の中心部分をなすコマで、天皇による初の歌舞伎観覧の様子を描いた部分である。この日のことは『明治天皇紀 第六』（明治二十年四月二十六日条）にも記載されている。歌舞伎演目は勸進帳や土蜘蛛など現代でも人気を誇るもので、描かれる役者は市川團十郎（九代目）、尾上菊五郎（五代目）、市川左團次（初代）など、同時代を代表する役者たちである。

『明治天皇紀』は、歌舞伎を初めて観劇し、明治天皇が大いに満足した様子を「頗る宸目悦ばしむるものあり」と記録している。観劇の場所は、欧化政策で有名な井上馨の屋敷内に特別にしつらえられたものであった。

天皇による初の観劇は、庶民の娯楽であった歌舞伎や演劇の地位上昇に大きく貢献した。二年後には歌舞伎座が完成、「団菊左時代」と呼ばれる隆盛を見せた。

ただしこの錦絵が示す意味はそればかりではない。実際には天皇一人の井上邸への行幸であり、皇后は別の日に観劇したことが、右記『明治天皇紀』に記されている。すなわちこの日の天皇の観劇は事実であるものの、この絵のように皇后と並んで観劇してはおらず、巧妙に虚実が織り込まれているのである。

近代の錦絵はこのように、「理想像」「当時の夢」をあたかも事実のような即時性と臨場感で描きこみ、同時代の人々を惹きつけた。何が「虚」で何が「実」なのかを探索する絵解きは、錦絵を鑑賞する際の面白味でもある。

では、この絵画で示される理想像とはなにか。皇族が近代化の象徴的な役割、とりわけ一夫一婦で、妻もそろって表に出る近代的夫婦像という、当時望まれた最新の夫婦・家族の秩序である。



「皇国泰平寿語録」(部分) 1887年

天皇と皇后が隣に並んで行幸啓（天皇や皇族の外出）を行うことは、近世までは例がなかった。天皇が向かって左側、皇后が右側に座る構図は、西洋の王族の例に習い、近世までの慣例を変更したものである。のちにひな人形の男雛と女雛の左右逆転や学校での「御真影」の並びに影響を与えた。

初の「天覧歌舞伎」があったことだけでなく、天皇と皇后が、新しい時代に求められた夫婦のありかたを表現する存在であったこと、絵画やすごろくという媒体は、時に過剰なまでにその旗振り役を担ったことをビビッドに教えてくれる。

△参考▽ 宮内庁『明治天皇紀 第六』、一九七一年、吉川弘文館、七三七～七三八頁。

（国立歴史民俗博物館 研究部准教授 樋浦郷子）